溶接ニュース（産報出版）
第3330号（2020年3月17日）1面

マイスターに聞く
溶接技能向上の勘所

第1回JWESマイスター認定
培った技を惜しみなく

仲摩吉成氏（日鉄テックスエンジ大分工場）

「溶接一筋に培った技術・技能を後進に伝承していくことはもちろん、溶接とはどういうものか、どうすれば健全な金属を作り出すことができるのか、自分自身も考えながら教えていきたい」と語るのは2019年11月、日本溶接協会マイスター（JWESマイスター）に認定された日鉄テックスエンジ大分工場（大分県大分市）係長の仲摩吉成氏。

「なによりも溶接が好きになること」

社内の溶接士にとどまらずインターンシップの高校生、地区大会に参加する他社の選手など垣根なく「私の持っているものすべてを惜しみなく提供したい」と話す。

03年、日本溶接協会九州地区溶接技術検定委員会の「九州溶接マイスター」を大分県第一号として受賞。16年は厚生労働大臣表彰卓越した技能者（現代の名工）に選出、17年には黄綬褒章を受章。

21歳で太平工業（現日鉄テックスエンジ）に中途入社。当時外部工事への進出を目指して立ち上げた溶接グループに籍を置くことになる。「溶接は未経験であり、ただ敷かれたレールに乗っていった印象。グループには溶接士が十数人在籍していたものの、残ったのは私を含む3人だけだった」

「溶接では人に負けたくない」一心で技能向上に励んだ。出張先でうまい溶接士を見つけると、頭を下げて教えを求めた。

「30歳までは溶接部のRTに相当苦労した。32歳くらいから欠陥は出さないという自負心が芽生え、現役を退く45歳まで自信を持って溶接に臨んだ」

また、32歳から40歳までは競技会で「あがり症」に苦労したという。一度競技を離れ、緊張を克服すると、大分県溶接技術競技会では2回（2000年度、01年度）、九州・沖縄地区溶接技術競技会では1回（00年度）優勝。全国溶接技術競技会では02年度、優秀賞（6位入賞）を受賞した。

種目はいずれも半自動溶接。03年、九州溶接マイスター受賞を機に44歳で競技は卒業し、後進の指導に専念した。

社内では日本溶接協会の溶接技能者評価試験の受験種目、各種競技会課題、裏波技術などを教える。「道具を大切に使うこと。そして溶接を好きになってほしい」と繰り返し説く。

指導者不足が深刻化するなか、その熱意は社外にも及ぶ。「私が上司に掛け合い、グループ員に理解を求めて、13年から毎年、九州・沖縄地区競技会の大分県代表の技術指導を当社で行い、大分県は現在6連覇を継続中である」

一昔前の、見て覚えろ――の世界から、今は溶接して見せて、やらせて覚えるが基本となる。

「ただ、今も昔も変わらないのは本人のやる気。どんな達人が指導してもやる気がなければ伝わらない。そして何よりも溶接が好きになること。時が経つのも分からないくらい集中することで、自身の溶接技術・技能を身に着けてもらいたいという思いで指導に当たっている」